

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	
佐藤 和宏 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：うつヌケ——うつトンネルを抜けた人たち</p> <p>著者：田中圭一</p> <p>出版社：KADOKAWA ISBN： <u>978-4041037089</u></p>	<p>2019年の梅雨は、一生忘れることができないと思う。</p> <p>初めて高経で教える機会をいただいた2019年は、初非常勤・初講義で、戸惑ってばかりだった。学生さんからの評判もすこぶる悪く(いわゆるビ逃げの大量発生・減っていくコメントペーパー)、大学から駅への帰りのバスでは、バスの揺れで涙がこぼれないよう、ちょっと上を向いていた。</p> <p>そんな2019年の梅雨は、寒いままの入梅により、私史上、最悪の体調だった。「もしや…ウツってやつか…?」と思っていた私に、同僚が「これ、読んでみるといいのでは」と薦めてくださったのがこの1冊。低気圧不調という言葉と、頭痛一発というアプリケーションを知った私は、以降、体調管理の重要性と、不安を「具体的な不安」にすることを知り、以降、学生にも薦めている。</p>
<p>② 図書名：ヒップホップの詩人たち</p> <p>著者：都築響一</p> <p>出版社：新潮社 ISBN： <u>978-4103014324</u></p>	<p>授業90分のうち、半分経ったタイミングの5分程、授業内容ではない余談を挟むことにしている。それというのも、幸いにして(?)私が担当する講義は、学生のみなさんにとって、進路に直接役立つ授業ではないからだ。覚えるよりもむしろ、考えてもらう何かのきっかけになれば、との思いからである。</p> <p>私たちは「普通」に縛られながら生きている。いわゆる規範というヤツである。しかしそもそも、「普通」とは何か、あるいは「日常」とは何か。私が末席を汚す社会学は、そのような問いを掲げてきた学問だ。貧困、逮捕、薬物——私たちの身近ではないかもしれないにせよ、確かに存在する苦しみを、詩(ことばであり、うたである)で表現することで、人間の多様性を確かな手触りに。</p>
<p>③ 図書名：表参道のセレブ犬とカバーニャ要塞の野良犬</p> <p>著者：若林正恭</p> <p>出版社：文藝春秋 ISBN： <u>978-4167915827</u></p>	<p>2017年にこの本が出たとき、「博論(博士論文)が書き終わったら、自分へのご褒美に」として読むのをガマンしていた。この1年、私は博論を書き、高経に捨ていただき、なんとか研究を続け、そして学生の前に立っている。</p> <p>若林は、資本主義の現在の形態である新自由主義——経済成長のために私たちを競争へと駆り立てる——からの「離脱」と、ある出来事(ぜひ本書を)から、キューバへと一人旅へ旅立つ。なぜ若林は、キューバへ行ったのか?それでいてなぜ、「本当のことを言わない国」日本へ帰ってきたのか?</p> <p>この社会の「外」に答えはない。そうであれば、この社会の中で生きざるを得ない私たちが「ともに」生きていくために必要なことはなにか——考えるのをやめたくなくて、毎週土曜日の夜、radikoにスイッチを入れる。</p>